

特集1

冬季企画

ヴィトルド・ゴンブローヴィッチ生誕100年記念・京都会議

開 催：2005年1月22日（土）12：00～19：00

会 場：アカデメイア立命 K209

映画《FERDYDURKE / 30 DOOR KEY》（J・スコリモフスキ作品、1992年）上映

ポーランド語版、日本語解説資料配布



ブエノスアイレスのレストラン・フラガータの男子用トイレには、かつて常連だったゴンブローヴィッチをしのばせるプレートが……

シンポジウム《ゴンブローヴィッチを日本で受け取るということ》

パネラー：関口時正（東京外国語大学教授）

沼野充義（東京大学教授）

安藤哲行（摂南大学教授）

久野量一（法政大学非常勤講師、当時）

廣瀬 純（龍谷大学専任講師）

兼進行役：西 成彦（本学先端総合学術研究科教授）

シンポジウム《ゴンブローヴィッチを日本で受け取るということ》

企画に当たって

2004年は、20世紀ポーランドを代表する作家W・ゴンブローヴィッチの生誕百年の年でした。1939年に国を離れてから、1969年、南仏ヴァンスでなくなるまで祖国の土地を踏むことのなかった彼は、長いあいだ「亡命作家」という名称にしばりつけられてきた観がありますが、今やまさに「20世紀ポーランドを代表した作家」としての押しも押されもせぬ名声が死後の彼を包んでいるかのように見えます。しかし、国民文学という枠組みから過剰にはみ出ていこうとしたこの作家をとらえるには、「亡命文学」という枠も「国民文学」という枠も、共に有効性を欠くといわざるをえません。今回は、「日本」そして「南米」という場所との関連の中にこの作家を置きなおし、言語や民族や国家の「外部」で文学を論じることの意味をあらためて問うための手がかりとして、ゴンブローヴィッチの有効な活用法を考えてみたいと思います。

2004年は、日本の読者にゴンブローヴィッチが身近になった記念すべき年でもありました。『トランス＝アトランティック』（西成彦訳、国書刊行会）と『フェルディドゥルケ』（米川和夫訳、平凡社）の二冊を手元に置きながら、ポーランド文学研究者およびラテンアメリカの研究者6人が、それぞれのゴンブローヴィッチを語ります。

（西 成彦）

